

Quelques contes de Straparola(résûmés)

青山, 太郎
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5342>

出版情報 : 言語文化論究. 12, pp.155-166, 2000-08-31. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



〈資料〉

ストラパローラ梗概

青山太郎

ヨーロッパにおいて昔話 Märchen の蒐集と記録が始まるのはロマン派以後のことだが、それ以前にもストラパローラ（16世紀）やバジール（17世紀）の物語集には、口承から汲まれたとおぼしい昔話が多く収められており、それらは昔話の古い型を伝えている。

バジールの「ペンタメローネ」は邦訳があるが（大修館書店、1995年）、ストラパローラの「愉しき夜毎 Le Piacevoli notti」には未だ邦訳がない。そこで、全73篇の物語のうち、昔話と見做しうる10篇の梗概を述べ、紹介を試みた。

昔話的性格はこの物語集のひとつの側面にすぎず、全体として見れば、伝奇的・世態的な novella 風の物語が多い。そうした物語の一例として、IX, 4（第9夜第4話）を採った。

底本は、Giovan Francesco Straparola “Les nuits facétieuses”, traduction revue et postfacée par Joël Gayraud, Librairie José Corti, Paris 1999 である。（以下の紹介は、Joël Gayraud のあとがきに依拠する）

Giovan F. Straparola の伝記的事実については、殆どなにひとつ分かっていない。同時代人による言及も一切無い。それゆえ Straparola という姓も、動詞 straparlare（喋りまくる）に基づく筆名ではないかと言われる。

1508年にヴェネチアで、Zuan Francesco Straparola の名による最初の詩集が出ているところから、おそらく、15世紀末の生まれであろう。しかし後の出版物に Straparola da Caravaggio (Caravaggio はロンバルディア地方、ベルガモ近くの小都市)と署名しているところを見ると、ヴェネチア生まれではないかも知れない。

1550年にヴェネチアで、25話からなる物語集が出て、非常な成功をおさめた（第一部）。

3年後に、48話を収めた第二部が出る。

1557年の全73話を収めた合本には、これが作者の意向により再版されたとのことわり書きがあるから、この時点で作者は存命中であったことが分かる。

以後1558～1613年の間に“Le Piacevoli notti”は23版を重ねたというから、よく読まれたものらしい。

しかし、1605年にこの本がヴァチカンの Index に載ったことから（主として、IX, 4の話が教会の忌憚に触れた）、その後は再版されなくなる。

仏訳の出現は早い。第一部は1573年に Jean Louveau の訳で、第二部は1576年に Pierre de Larivey の訳で出ており、ペローはこれをよく知っていたと思われる（いっぽうナポリ方言で書かれたバジールの本は仏訳がなく、ペローはこれを知らなかった可能性が高い）。

1. Straparola I, 4

サレルノ公 Thibaud の妻は臨終に当たり、自分の指輪の合う女でなくては再婚しないでくれと言が残す。

指輪の合う女は娘の Doralice しかいないので、ティボーはドラリスと結婚しようとする。

ドラリスは乳母に助けを求める。

乳母はドラリスを大きな衣装戸棚に隠し、市場に運ばせる。

ジェノアの商人が衣装戸棚を買い、イギリスへ持ってゆく。

イギリス王 Genese がこの見事な衣装戸棚を買い、自分の寝室に置く。

ドラリスは毎日、人のいないときに戸棚から出てきて、王の寝室を整える。

不思議に思った王は、或る日ドラリスを発見、これと結婚し、二児をもうける。

ドラリスが衣装戸棚に潜んで逃走したと気付いたティボーは、商人に変装して諸国を巡り、かのジェノアの商人に出会い、衣装戸棚がイギリス王の所有になったことを知る。

ティボーは見事な商品を用意してイギリスの王宮へ行き、王妃ドラリスに取り入る。ドラリスはこれが父親であることに気付かない。

王宮に泊まったティボーは、王妃の短剣で二人の王子を刺し殺して逃げる。

王は占星術師（実はこれもティボーの変装）に犯人を占わせ、血まみれの短剣によりドラリスを犯人と断定、首まで土に埋めて緩慢に殺すという刑に処する

ティボーはサレルノへ帰り、自分のしたことを乳母に自慢する。

憤慨した乳母はイギリスへ赴き、王に万事を告げる。

王は直ちにドラリスの刑を止めさせ、軍を集めてサレルノを攻め、ティボーを捕虜にしてイギリスへ連行し、四つ裂きの刑に処する。

王とドラリスは子宝に恵まれ、未永く幸せに生きる。

AT 510B (驢馬の皮)

Basile II, 6 「牝熊」

Perrault 「グリゼリディス」、「驢馬の皮」

Grimm 65 「千枚皮」

2. Straparola II, 1

イギリス王 Galiot と王妃 Hersile の間には、なかなか子供が出来なかった。

或る日王妃が庭で昼寝をしていると、三人の妖精が来て王妃を祝福する。

第一の妖精の願い：彼女がこの世で一番美しい息子を産むこと。

第二の妖精の願い：息子がこの上ない徳と慈悲心に恵まれること。

第三の妖精の願い：息子は豚の姿で生まれ、三人の妻を娶らぬ限りこれから脱することができない。

両親はせっかく生まれた息子が豚であることを悲しむが、ともかく育てることにする。

成長した豚が、或る日結婚したいと言う。

王妃はおういに困惑するが、三人の美しい娘を持つ貧しい母親を捜し出してきて、上の娘を豚王子の嫁として差し出させるよう、何とか話をつける。娘は嫌々ながら承知する。

初夜に豚は娘を殺す。王妃がこれを咎めると、豚は、娘がぼくを殺そうとしたからだと答える。

次いで豚は中の娘と結婚するが、これも殺す。

さらに豚は末娘と結婚。末娘は豚との結婚を嫌がらない。豚は末娘に自分の秘密を打ち明け、豚の皮を脱いで美しい王子になって見せる。

やがて子供が生まれる。

末娘は王と王妃に夫の秘密を打ち明け、二人は息子が美しい青年であることを知る。王は豚の皮を寸断して捨てる。

王子は王位を継ぎ、豚王と呼ばれ、永く立派に国を治める。

AT 425 (消えた夫を捜す)

425A (動物婿)

433 (蛇王子)

Basile II, 5 「蛇」

Grimm 88 「鳴いて跳ねる雲雀」

108 「ハンス・ハリネズミ坊や」

3. Straparola III, 1

リグリア海の Caprare の島に貧しい寡婦が住んでおり、息子は漁師だったが、魚は一向にとらず、それでいて毎日海から帰るときは「大漁だ！ 大漁だ！」とわめきながら帰ってくるので、Pierre の馬鹿と呼ばれていた。

彼らの家の真向かいには Lucien 王の王宮で、十二歳の王女 Luciane は、そうした Pierre の馬鹿を毎日からかい、Pierre はこれに腹を立てていた。

或る日 Pierre は巨大な鮪を捕らえるが、鮪が望みは何でも叶えてやるからと言って頼むので、可哀相になって放してやる。

家の前まで来ると、王女がいつものように彼をからかう。怒った Pierre は鮪の力で王女を妊娠させる。

十二歳の王女の妊娠に、王と王妃は驚き心を痛めるが、どうしてこうなったのか分からない。

生まれた子供は玉のような男の子だった。

王は国中の十四歳以上の男子すべてを呼び集め、幼児に会わせる。幼児が喜んで Pierre の首に抱きついたことで、Pierre が父親と知れる。

王は Pierre と Luciane と幼児を、樽に入れて海へ流す。

しかし鮪の力により、樽は無事近くの島へ流れ着く。王女はやはり鮪に頼んで Pierre を美しく賢い若者に変えてもらい、島に立派な宮殿を建て、ここで暮らす。

いっぽう王と王妃は、一人娘と孫を失った悲しみを紛らそうと、エルサレムへの巡礼を企てる。船出すると間もなく、とある島に立派な宮殿を認めて上陸する。Pierre と Luciane が王と王妃を出迎え、歓待する。王と王妃は、これが Pierre と Luciane であることを知らない。

出発する時になって、王の服の下から高価な林檎が転がり出る。王は、林檎がなぜ自分の服に入ったのか分からない、自分が林檎を盗もうとしたなぞは、とんだ濡衣であると弁解する。

Luciane は、身に覚えのない罪で責められるのがいかに辛いことか、お分かりになりましたかと言って、自分が Luciane であることを明かす。

一同は揃って Caprare の島へ帰り、Luciane と Pierre は改めて正式に結婚し、Pierre はやがて王位を継ぐ。

AT 675 (のらくら息子)

Basile I, 3 「ペルオント」

Grimm Anh. 8 「愚かなハンス」

4. Straparola III, 3

Monferrat の侯爵 Lamberic には、永いこと子供が出来なかった。

或る日奥方が庭で昼寝をしていると、小さな蛇が体の中に入る。

やがて奥方は女の子を産むが、生まれた子の頸には蛇が巻きついていて、蛇は庭の茂みに消える。子供は非常に可愛く、Blanchebelle と名づけられる。

Blanchebelle が十歳の時、庭で蛇に出会う。この蛇は、彼女の姉 Samaritaine であった。

蛇は牛乳と薔薇水を用意させ、Blanchebelle をこれに漬ける。Blanchebelle は輝くばかりに美しくなる。髪を梳かすと、真珠と宝石が転がり落ちる。手を洗うと、薔薇と堇が零れる。

Blanchebelle はナポリ王 Ferrandin と結婚するが、Ferrandin の継母は Blanchebelle を憎む。

チュニス王がナポリを攻め、王は出征する。

継母は二人の部下に Blanchebelle を殺させようとする。二人の部下は Blanchebelle を森に連れ出し、両手を切り落とし、眼をくり抜いて、森に置き去りにする。

継母は自分の娘のひとりや姫に仕立てる。帰ってきた王は、妃の変わりように驚く。

いっばう Blanchebelle は、森で老人の一家に助けられる。

Blanchebelle は森で Samaritaine に再会し、Samaritaine は妹の傷を癒す。

Blanchebelle と Samaritaine はナポリの王宮の隣に館を構え、王を招待する。

Samaritaine は王に Blanchebelle の苦難を語り、彼女こそ本当の妃であることの証拠を見せる。

王は継母に、こういう悪いことをした人間にはどんな罰を加えるべきかと尋ねる。継母は火刑に処すべきであると答え、そのとおりの罰を受ける。

AT 706 (手無し娘)

709 (白雪姫)

(410 眠り姫)

(894)

Basile III, 2 「手なし娘」

II, 8 「奴隸娘」

Grimm 53 「白雪姫」

89 「鶯鳥番の娘」

5. Straparola V, 2

ボヘミヤに Bogolane という貧しい洗濯女が住んでいて、Cassandre と Adamantine という二人の娘があった。母親は姉妹にひと箱の麻屑を残して死んだ。

姉は麻で糸を紡ぎ、これを市場で売ってくるよう妹に言いつける。

妹は市場で、老人が一体の人形を売っているのを見て、これが欲しくてたまらなくなり、糸を人形と交換して帰る。姉は大層怒る。

夜になって妹は、人形の腹と尻に油を塗って撫でてやり、抱いて寝る。人形が「ママ、ママ、うんちがしたい」と言う。エプロンを広げてやると、人形はそこにいっぱいのお幣を出す。これが毎夜繰り返される。

姉妹はたちまち裕福になる。隣の女がこれを不審に思い、問い質す。姉は人形のことを打ち明ける。

隣の女は夫と共に謀して人形を盗み出すが、人形は臭い汚物しか出さない。夫は癩癩をおこし、人形を外の汚物の堆へ放り出す。

百姓が荷車で汚物を運び去り、堆肥にする。

或る日 Drusian 王が、狩りの途中便意を催す。用をたした王は、何か尻を拭くものを探して来るよう家来に命ずる。家来は堆肥の中に人形を見つけ、これを王に差し出す。

王がこれで尻を拭こうとすると、人形は王の尻に噛みつく。引き離そうするとますます歯を立て、陰囊を締め付けて離れない。王は痛さのあまり半死半生になる。

王は、人形を引き離した者には国土の三分の一を与える、もしもそれが若い娘ならば結婚するという布令を、国中に出す。

Cassandre と Adamantine は宮殿へ駆けつける。Cassandre が試みても効果がないが、Adamantine が人形に声をかけ愛撫すると、人形は王の尻を放す。

王は Adamantine と結婚し、Cassandre にも立派な結婚相手を見つけてやる。

その後人形は姿を消す。

AT 571C (噛みつく人形)

Basile V, 1「鶯鳥」

6. Straparola VII, 5

昔この町に貧しい男が住んでいて、三人の息子があつた。

父親の貧しさを見かねた三人の息子は、これ以上父親に負担をかけまいと、十年後に帰ってくることを約束して旅に出る。

長男は兵隊になり、その豪胆さと勲功によってたちまち抜きん出た存在となる。彼は二丁の短剣を使って、どんな高い塔にも登ることができた。

港町へやって来た次男は船大工の徒弟となり、たちまち腕をあげて、国中に並ぶ者ない船大工となる。

夜鳴き鶯の歌声に聞き惚れた三男は、それを追って深い森に入り込み、ここで十年を過ごした結果すっかり野生化してしまい、小鳥の言葉が分かるようになる。

十年後、家へ帰るため約束の場所で落ち合った三人は、近くの旅籠に泊まる。

旅籠の外の木に一羽の小鳥が飛んできて、「この旅籠の右手に、あなた方のための宝が埋まっている」と歌う。

三人は宝を掘り出し、金持ちになって家へ帰り、父親を喜ばせる。

或る日三男は、一羽の小鳥がこう歌うのを聞く。「エーゲ海に、ニンフ Chiose の名を冠するとても美しい島があり、ここに昔アポロンの娘が Chios と呼ばれる城を建てた。五百年来この城は夥しい宝を蔵し、ニンフ姫 Agla を閉じ込めており、二匹の怪蛇がその入口を守っている。城に入り、中央の塔に登る勇気のある者は、宝と姫を我物とするだろう」。

三人は宝探しに行くことにし、次男が腕によりをかけて軽やかな船を造る。

船は満帆に風を受け、たちまち Chiose 島に着く。

長男が二丁の短剣を使って塔に登り、まず Agla 姫にロープを巻いて下へ降ろし、次いで山ほどの宝石を運び出す。

三人は無事帰宅し、宝を山分けするが、姫が誰に帰属するかで紛争が持ち上がり、この紛争はこんにちに至るも解決していない。

AT 653 (名人四兄弟)

671 (三つの言葉)

Basile V, 7 「五人の息子」

Grimm 71 「六人男世界をのし歩く」

129 「腕利き四人兄弟」

7. Straparola VIII, 5

シチリアはメッシーナの Lactance 親方は、表向きの職業は仕立屋だが、実は妖術師でもあった。

Lactance のもとで仕立職の見習いをしていた Denis という若者が、或る夜親方の妖術を目撃し、自分もこの道に熟達しようと決心する。以後仕立職には関心がなくなる。

弟子が仕立て職を一向に覚えようとしないので、親方は、仕立職よりもっと難しい妖術のことなぞこの弟子には分からないだろうと考え、以後弟子の前に自分の妖術を隠さなくなる。Denis の妖術は急速に進歩する。

或る日 Denis の父親が親方の店に立ち寄ると、息子が仕立職ではなく雑役をさせられているので、怒って息子を連れ帰る。

父親の嘆きを見て息子は言う、「あなたは無駄に金と時間を使いはしなかった。明日わたしは馬になるから、わたしを売って金になさい。ただし手綱は決して売らず、持ち帰るように」。

翌日父親が息子の化けた馬を市場へ曳いてゆくと、そこへ親方が通りかかり、馬の正体を見抜く。親方は商人に変装して馬を買い取り(父親は手綱を外すのを忘れる)、厩に繋いでこき使う。馬はたちまち痩せ衰える。

Lactance の二人の娘が馬を哀れみ、水浴びをさせようと川へ曳いてゆくと、馬は魚になって水中へ姿を消す。これを知った親方は、鮪になって魚を追う。

弟子はルビーの指輪になって、王女 Violante の手籠にとびこむ。

王女は宮殿でこの指輪を指にはめる。夜中、指輪から若者が現れ、王女に事情を打ち明ける。王女は若者を赦す。

王が病み、病気は悪化する。親方は医者と偽って宮殿へ赴き、王を診察する。もしも病気を治したら、その時は謝礼に、王女の持っているルビーの指輪をもらいたいと言う。王は喜んで承知する。

親方は王を治す。王は王女に指輪を渡すよう命ずる。

王女の涙を感じた弟子は、人間の姿に戻って王女を慰める。

翌日親方が指輪を受け取りにくると、王女は指輪を壁に投げつける。指輪は石榴の実になって散らばる。親方は鶏になってこれをついばもうとする。

弟子は狐になって鶏を食ってしまう。

弟子は王女と結婚する。

AT 325 (魔法使いの弟子)

Grimm 68 「ぺてん師と大先生」

8. Straparola IX, 4

かつてフィレンツェの町に、どこの修道会か分からないが、Tibère 師という僧がいた。学識豊かで説教もうまく、聴罪師としても人望を集めていた。

或る日彼のところへ、彫刻家 Quinquin の妻 Prudence が告解にやって来る。Quinquin はその若さにもかかわらず、腕前はフィレンツェ随一と言われた彫刻家である。

Tibère 師は、美しく慎ましやかな Prudence に激しい恋心を燃やし、以後なにかと付きまとい、彼女を靡かせようとする。

不安になった Prudence は、夫に相談する。夫は Tibère を懲らしめるため、一計を案ずる。

Tibère に言い寄られた若妻は、今晚夫が家を留守にするからおいでなさいと、色好い返事をする。Tibère は夕食の材料を買い込み、喜び勇んでやって来る。

ところが Prudence は夕食の料理に手間取り、なかなか身を任せようとしなない。

男は待ちきれず、料理はもういいからと、先に服を脱いでベッドに入る。女はその服を隠してしまう。

このさまを物陰から覗っていた Quinquin は、こっそり裏口から出て表へ回り、ドアを叩いて今帰ったと怒鳴る。

驚いた Tibère が、服をくれ、ベッドの下に隠れるからと言うと、女は、そんな暇はありません、裸のまま台座に登って、脚を組み合わせ、両手を広げていらっしゃい、そうすれば夫は貴方を、数日来手がけている磔刑像だと思い、気付かないでしょうと言う。男はこの忠告に従う。

入ってきた夫は、ちょうど出来上がった料理を食って寝てしまう。Tibère は逃げ出すことが出来ない。

翌朝、近くの修道院から二人の修道尼が、かねて注文してあった磔刑像の進捗具合を見にやって来る。二人の尼は台座の上の裸の Tibère を見て、まるで生きているようだと思嘆する。ただ、前に垂れているものが、女子修道院用の磔刑像としては少し露骨過ぎるのではないかと言う。

彫刻家は、それならあそこは削りましょうと言って、鑿を手取る。Tibère は震えあがり、素っ裸のまま往来へ逃げ出す。尼たちは、彫像が生きて動いた、奇蹟だ奇蹟だと言って祈る。

大恥をかいた Tibère は、町から逐電せざるをえなくなる。

9. Straparola X, 3

Cesarin de Berni は貧しい寡婦の息子だった。

或る日森の洞穴に、一群のライオンの仔、熊の仔、狼の仔を見つけ、一匹ずつ取ってきて育てる。

成長した動物たちの助けで狩りはいつも上首尾に運ぶが、隣人たちにこの秘密を知られ、或る日獣たちを従え黙って家を出る。

シチリア王国で或る隠者のもとに泊まる。隠者から、この地方を荒らしている龍の話を聞く。この龍には毎日人身御供を捧げねばならず、明日はそれが王の娘の番であるという。

Cesarin は龍に食われようとしている Dorothee 姫のところへ行き、姫を慰め、獣たちに助けられて龍を倒し、その舌を切り取るが、そのまま隠者のもとへ帰ってしまう。

戦いの現場を通りかかったひとりの百姓が、龍の頭を切り取って功業を我が物とし、姫との結婚を要求する。

隠者がこのことを知り、王に忠告し、Cesarin を王に会わせる。

Cesarin は龍の舌を取り出し、龍退治が自分の仕事であることを示す。

Cesarin は姫と結婚する。

Cesarin の母親と姉妹たちもシチリアへ呼ばれるが、性悪な彼女たちは Cesarin を嫉妬し、これを毒殺する。

三頭の獣たちは耳に鉛を詰められ聾になるが、爪で鉛を掻き出し、主人の死を知り、力を合わせて主人の体に入った毒を消し、主人を蘇生させる。

母親と姉妹たちが Cesarin に近付くと、傷から血が流れて、彼女たちが犯人であることを示す。王は彼女たちを焼き殺す。

Cesarin は姫と、また三頭の獣たちと、末永く幸福に暮らす。

AT 300 (龍退治)

Basile I, 7「商人の二人の息子」(AT 300 と AT 303 の合体)

Grimm 60「二人兄弟」

85「金色の子供たち」

10. Straparola XI, 1

ボヘミアの貧しい寡婦 Soriane には三人の息子がおり、長男には粉を練る桶、次男にはパテをひっくり返す木の籠、三男の Constantin le Fortuné には一匹の牝猫を残した。

長男と次男は桶と籠の賃貸してなんとか口を糊していたが、三男にまで食物を分けてやろうとはしなかった。

牝猫は三男を慰め、野原へ行くと寝たふりをして兎を捕まえ、これを王宮へ持ってゆき、主人コンスタンタンからとして王様に献上する。コンスタンタンとはどういう人かという問いに、若い紳士で、美と善意と徳に溢れた御方でございますと答える。また、王様の豪華な食卓から食物をくすねてきて、コンスタンを養う。

牝猫は幾度か兎を献上した後、コンスタンタンを川へ連れてゆき、裸にして首まで水に漬け、「助けてくれ！ コンスタンタン様が溺れる！」と叫ぶ。王様が聞きつけ、コンスタンタンを水から引き上げ、立派な服を着せ、王宮に泊まらせ、王女 Elisette と結婚させる。

新妻と豪華な嫁入り道具と供の人々の行列が、コンスタンタンの家へと向かう。

牝猫は行列に先行し、出会った一群の騎士たち、羊飼いたちに、「お前たちの主人はだれだ」ときかれたら「コンスタンタン様です」と答えるよう吹き込む。

牝猫は或る城に行き着き、城の人々に言う、「一時間もしないうちに恐るべき軍勢が攻めて来る。この城がコンスタンタン様のものだと言え、あなた方は破滅を免れる」。

行列が到着し、一同はコンスタンタンのものであるというこの城に宿泊する。

この城の持主である領主は、前日から妻を連れて他の館へ出掛けていたのだが、帰途、いかなる不幸によってか急死してしまう。その結果コンスタンタンが一同の推挙により城の主となる。

やがてボヘミア王 Morand が死ぬと、Elisette は一人娘にして唯一の世継ぎだったので、夫のコンスタンタンが王位に着く。

AT 545 (長靴をはいた猫)

Basile II, 4 「ガリューゾ」

Perrault 「長靴をはいた猫」

Grimm 初版33 「長靴をはいた猫」

11. Straparola XI, 2

ピエモン の Trine の館に住む Xenophone という公証人に、 Bertuce という息子がいた。 Xenophone は Bertuce が14歳の時死んだが、その遺言によれば、息子は30歳にならねば遺産を相続できない。ただし、25歳になれば300デユカの金額を受け取ることが出来る。

25歳になった時、息子は母親から100デユカをもらって旅に出る。

息子は、盗賊がひとりの商人を殺したばかりか、死体をめった斬りにしているのを見て、死体を80デユカで買い取り、残りの金でこれを教会の墓地に葬ってやる。

母親は息子のお人好しぶりを嘆くが、息子は200デユカをもらって再度旅に出る。

森の中で、二人の兵士が攫ってきたひとりの娘の奪い合いをしているところに行き合う。彼女は Navarre 王 Chryssippe の娘 Tarquinie なのだが、兵士たちはそのことを知らず、もちろん息子も知らない。

息子は200デユカで娘の身を贖い、家へ連れ帰る。母親は、またしても息子が金を無駄遣いしたと言って嘆く。

ナヴァル王は八方手を尽くして娘の行方を捜させ、三ヵ月後、姫の所在を突き止めた家来の者が、Trine の Bertuce の家へやって来る。

Bertuce は、娘が両親のもとへ帰れるのならと、喜んで姫を引き渡す。姫は Bertuce に自分の身分を明かし、将来王がわたしを結婚させようとする時は、必ずナヴァルへ来るように、またその際右手を頭に載せて自分が Bertuce であることを知らせるように、なぜならあなた以外の人と結婚する気はないから、と言い残して去る。

やがて王が姫を結婚させるという知らせを耳にし、Bertuce は瘦馬に乗ってナヴァルへ出発する。

途中、大勢の従者を従えた立派な身なりの騎士に出会う。Bertuce がナヴァルへ行く理由を告げると、獲物の半分を渡すという条件で、立派な馬や服を貸してくれる。

姫は大勢の求婚者の内から、右手の合図によって Bertuce を見分ける。

新妻を伴って家へ帰る途中、Bertuce は騎士に会って借りた馬や服を返し、持ち物の半分を渡す。騎士は、姫をも半分に分けろと言う。Bertuce は、姫を殺すくらいなら生きてまま取れと応える。騎士は笑って、わたしはお前が葬ってくれた死者の霊だと言って姿を消す。

AT 506A (死者の恩返し)

Jean de Calais

Jean de Bordeau